

 <p>Viet Nam</p>	学校名：新潟清心女子中学・高等学校	● 実践教科等：CE II
	氏名： 関山茂樹	● 時間数 : 6時間 ● 対象生徒 : 高2(英語) ● 対象人数 : 69人
[担当教科： 英語]		

1 単元名：“Saving the Cherokee” および “Ashura: A Statue with Three Faces” から見る言語・文化多様性と ESD について（三省堂：Crown Communication English II より）

2 単元の目標：チェロキーの母語を守る闘いを通して、民族にとって母語を失わないことの意味を考える。また、阿修羅像の魅力を探るとともに、奈良時代の東洋と西洋の交流について知る。

3 単元の指導について

(1) 教材観：ESD を英語学習に統合し、「内容言語統合型学習」(CLIL)を実施するうえで、下記のポイントが重要と考える。

※ “Cherokee”は、絶滅が危惧される言語と文化の問題を提起しており、環境や発展途上国における開発や貧困の問題を主に取り上げる ESD に新しい視点を提供する。

※ “Ashura”は、国民文化が世界との関わりの中、他文化との相互性から生まれてくるものであることを示唆し、文化本質主義に対する批判的な対論を提案している。

(2) 児童生徒観：中高一貫の女子校、また、カトリックのミッション校である。キリスト教が説く「隣人愛」をとおして、弱者に身を割く生き方を身近なものと感じている。施設訪問などの奉仕活動も実践もしているので、弱者についての問題意識も高い。

(3) 指導観：ESD は情報の伝達だけではなく、それを吟味し倫理的態度を決定する主体形成のプロセスであると考え。CLIL による ESD 英語授業の後、2時間の日本語による講演をおこない、さらに視点や例題を変えつつ、またベトナムでの経験を織り交ぜ、SDGs全体を概観し、更に深い理解を促した。また、一年をとおして ESD フォトコンテスト、ESD 英語スピーチコンテストに取り組みせ、一人の人間として SDGs と如何に向き合うべきかを考えさせた。ESD をプロセスとしてとらえ、一回のイベントで終わらせず、ESD を日常化することを目標に取り組んだ。

4 評価規準

観点	(a) コミュニケーションへの関心・意欲・態度	(b) 外国語表現能力	(c) 外国語理解能力	(d) 言語・文化についての知識・理解
評価規準	※ 民族にとって言語とは何かを考え、母語を失った人々に共感し、自分の考えを積極的に表現できると同時に、他生徒の意見も批判的に理解できる。	※ 「危機に瀕した言語を救うために何ができるか」について、また他の ESD トピックについて自分の意見を書ける。	※ 絶滅しかけたチェロキー語が守られてきた経緯や、阿修羅像と様々な文化の相互性についての英文を読んで理解できる。	※ 民族にとっての母語と文化の大切さや、阿修羅像を生み出した文化の相互性を理解できる。

評価方法	エッセー、スピコン ピアレビュー	エッセー・口頭発表 表・スピコン	定期考査	エッセー
------	---------------------	---------------------	------	------

5 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	ESD から読み解く “Cherokee”	<p>※ 6月におこなった ESD 授業の内容をレビュー</p> <p>※ SDGs の復習</p> <p>※ My SDGs : スピコンのテーマの確認 : 生徒たちは、各自、自分がテーマとする SDGs を選び、スピーチ原稿作成を課題とされている</p> <p>※ My SDGs : スピコンのテーマに選んだ SDGs をジブンゴトにさせ、自己変容から社会変容への流れを理解させる取り組み</p> <p>※ “Cherokee” をレビューしながら、ESD との関連を考える</p> <p>※ 4つのレンズに沿って、チャプターが分割されていることに気づかせる</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 持続可能な開発の概念の確認 2. SDGs について確認 3. 女子教育を例に、SDGs 間の相互性を理解 4. カトリックの教義の ESD の位置づけ (未来の世代、同世代、過去の世代に対する <u>3つの隣人愛</u>) 5. My SDGs の認知地図の作成。生徒たちに各自のスピコンテーマを付箋に書かせ、ボードに貼り付けさせる。各自が選んだ 17 の SDGs を、4つの領域に落とし込み、その相関関係を可視化し、生徒たち相互で理解する : <ol style="list-style-type: none"> ① 人間の成長に関する領域 ② 人間の生存に関わる領域 ③ 社会の成長に関する分野 ④ 社会の存続に関する領域 6. 特定の SDGs を選んだ理由、パーソナルなきっかけをスピーチに織り込む 7. <u>4つのレンズ</u>を導入し、チェロキーの物語を再構成させる : <ol style="list-style-type: none"> ① 文脈的なレンズ ② 統合的なレンズ ③ 批判的なレンズ ④ 変容的なレンズ
2	ESD から読み解く “Ashura”	<p>※ ESD のレンズをとおして “Cherokee” を再読</p> <p>※ 無形文化遺産に対するユネスコのアプローチを理解する</p> <p>ESD のレンズをとおした “Ashura” の読み方 :</p> <p>※ 過去の隣人の理解が未来の隣人への愛とつながる理由を考察</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 言語消滅の理由を考察 : 植民地化、近代化に伴う国語の生成過程における少数言語の排除、またグローバル化による伝統文化・社会の喪失など (文脈的レンズ) 2. 言語と生物の多様性の相関性についてのユネスコの主張を理解 (統合的レンズの導入) 3. 少数言語を保存する必要性についての反対意見と、言語を奪われた人々

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

		<p>※ 留学生によるルーマニアの少数民族についての発表</p> <p>※ 本校ダンス部による永島流樽砧のパフォーマンス：北前船による列島各地の文化交流から生まれた地域伝統芸能であることを理解</p>	<p>の生き様・死に様(絶望死)を紹介(批判的レンズ)</p> <p>4. 「最後の話者」について考えさせ、母語を話す権利が人権の一部であることを認識させ、自分ならばどうかを考えさせる(共感力の育成)</p> <p>5. 文化本質主義への批判として読解：文化相対主義について</p> <p>6. 自分たちの身の回りで、20年後失われてしまっているかもしれない文化的実践について考えてみる。</p> <p>7. 地域の身近な伝統文化を素材に、その成り立ちを考える</p>
3	Photo-Language Retelling	<p>※ ESD フォトランゲージのリテラシーを学ぶ</p> <p>※ 生徒たちがカンボジア研修(8月)で撮影してきた写真を発表</p> <p>※ ESD フォトコンテストの受賞者の発表</p> <p>※ My SDGs:各自のスピーチコンテストの確認</p>	<p>※ 教員がベトナムで撮影してきた写真を見て、英語で文字通り説明し(リテリング)、ESDのレンズにより解釈する</p> <p>※ 各自のスピコンのテーマを見直す：</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自己変容から社会変容へ ● SDGsを個人化する
4 5	命を見つめる ESD	※ 下記詳細記述	※ 下記詳細記述
6	共感から アクションへ	<p>※ 質問を、「もし自分が、最後の話者だったら」(共感)から「もし自分が、最後の100人の話者のひとりだったら」(協働)に変えて、英作文を作成する</p>	<p>※ 伝統を伝える学びの場を「如何に」作るかについて具体的に考えさせる</p> <p>※ そうした取り組みを持続可能にするためには、更に「何が」が必要か、より具体的に考えさせる</p> <p>※ ディテールを考えさせることによって、曖昧な英作文からより論理的な英作文指導が可能となる</p>

6 授業事例の紹介

小単元名【命を見つめる ESD:世界で起きていること】

(1) 指導案

(ア) 実施日時:10月31日(水)第3~4限

(イ) 実施会場:体育館

(ウ) 本時の目標:高校2年生に対しては、上記、CLILによる英語授業において十分に理解できなかった点について、より深い理解を促すこと。また、他の中高全校生徒に対しては、日本語でESDの概略を説明すること。また、引き続き、その文脈で、教員のベトナムでの経験を生徒に紹介すること。

(エ) 指導のポイント:

ESD の理念が、なぜ「誰一人取り残すことなく」なのかを高校2年生だけでなく、中学1年生にも理解できる言葉と教材(画像・動画)によって説明すること。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
1 時間 目	ESDの概略 世界で起きていること	持続可能性の問題について スライドを使って確認: ● 地球温暖化 ● 女性の人権侵害 ● 最後の話者について ● 人権侵害の告発 ● 近代化とグローバル化 ● メガシティと都市環境 ● 農村の限界集落化 ● 貧困について ● 日本の貧困について	スライド と 講演	● 環境、人権、戦争 ● 他者の人権侵害を知ることの重要性 ● ユニバーサルな権利としての人権 ● ESDにおける「誰一人取り残すことなく」の意味を確認 ● ホーチミン市の動画と写真により、成長するメガシティの様子を紹介 ● 戦争と人権侵害について確認 ● 支援・被支援の関係でだけで日越を理解しない ● 私達自身を変えなければならない点	(評価基準) ● 持続可能な開発の理解 ● 地球温暖化の危機についての理解 ● 人権侵害についての理解 ● 外国人労働者への人権についての理解 ● 支援と学びの相互性の理解 (評価方法) 講演後の振り返りシートの作成
2 時間 目	ベトナムから学ぶこと	● 日本へのベトナム人実習生 ● 日本企業:人づくり・技術移転(清水建設) ● 海外青年ボランティア ● ユネスコ憲章			

(2) 授業の振り返り

本授業は、カトリックのミッション校である本学園の創立記念日の記念授業としておこなわれた。厳かな「死者の日のミサ、いのちを見つめるミサ」の後、スクリーンを囲んで円形に自由に腰掛けてもらった。ESD の授業を、文字通り「誰一人取り残すことなく」、教職員を含め学園全体でおこなう機会は非常に貴重なものであり、そうした集団的な学びにはそれ自体のメリット、共感力(つながりを大切にする態度、コミュニケーションをおこなう力、進んで参加する力)を呼び起こす力があると感じた。

ベトナム、モー村での体験を話すことで、ESD をより具体的な文脈で伝えることができた。モー村では、自分たちが飼っている鶏や魚を捌いて食事としている。また、女性たちは、高床式家屋の床の上で子供を生み、床下には棺桶を置いている。前近代的な農村生活の中では、生と死がより近くにある。それは、私達の近代的な消費生活では失われてしまった貴重な命に関わる経験だ。生徒たちは、鶏の解体の動画に驚きつつも、そのメッセージをしっかりと理解してくれた。一方で、そうした村人たちは、我々と同様に電力やスマホに依存している。また、現金を求めて都市に出稼ぎや進学をしている。そんな状況でも、モー村は、様々な国々から観光客を受け入れるグローバルなアグリツーリズムの拠点として共同体を維持している。そこでは、農村の伝統は、商業化されざるを得ないが、商業化をとおして伝統は引き継がれている。ベトナムで取材した動画や写真によって、近代化とグローバル化によって如何にベト

ナムの人々の生活が劇的に変容しつつあるかを具体的に理解させることができた。

ベトナム戦争については、爆撃、枯葉剤の散布の様子、ナパームガール、米兵たちの憎しみ・苦しみ、米軍の侵略に対するベトナム人たちの怒りなどをドキュメンタリー映画からの抜粋によって紹介した。米軍の爆撃機は日本から出撃していたし、ベトナム戦争の特需により、日本は未曾有の高度成長を遂げた。日本料理の天ぷら蕎麦のエビが実はベトナムから輸入されているように、発展国としての日本の地位も他国の戦争と無関係ではない。枯葉剤のために生まれた障害者たちを支援するツーズ病院平和村について説明する際に、1983年に出版された『母は枯葉剤を浴びた』（中村梧郎）を紹介した。自分は、学生時代に、この本に出会い、理不尽な運命を背負わされた奇形児たちの存在について知ったが、現在第4世代の子どもたちにまで影響が出ていることを知り、改めてショックを受けたこと、痛恨の気持ちを伝えた。ツーズ病院で、24年間、一度も意識を取り戻したことがないという障害者を前に、人権侵害は知るだけでは十分ではなく、問題を忘れないこと、追いつけること、意識のない人に宿るころへの想像力、共感力も大切であることを自分の体験から伝えた。人権は、ユニバーサルな権利であり、他者の人権侵害を許せば、人権は特権に転化する、だからこそ「誰一人取り残さない・残せない」のだという話をした。

また、「いのちを見つめる ESD」ということから、①地球環境を守ること、②戦争をおこさないこと、③一人ひとりが幸せに生きること、この3つがどれ一つ欠けても持続可能な開発は可能ではないことを生徒たちに伝えた。この授業がおこなわれた当時、実際にニュースになりつつある事柄をできるだけ盛り込んだ。ホットハウス・アース現象、ナディア・ムラド氏のノーベル平和賞受賞、サウジアラビアの女性の人権侵害、母語を奪われた人々の絶望死、また日本での過酷な労働により失踪や自殺に追い込まれるベトナム人を主とする外国人実習生たちのことなどについて触れた。ベトナムで取材した人々、特に、日本語を学び、将来、日本関係の仕事をすることを希望するベトナム人の若者たちの幸福観を紹介した。お金よりも命、家族や友人と関係、職場における喜びを優先するベトナム人の価値観について知り、そんな若者たちを死に追いやっている日本社会について一緒に考えた。また、日本人の若者たちが、ベトナムでのボランティア活動をとおして、日本で生きていては決して得られないような充実感をつかんでいることも伝えた。そして、最後に、ユネスコ憲章を全員で朗読し、持続可能な開発が、国家だけではなく、個人の心の強さ、「こころの砦」にかかっていることを確認して講演授業を終えた。

(1) 使用教材:ベトナム人実習生に関しては下記新聞記事を紹介した:

- 「日本人の幸せって何なの」(留学生からの投稿、朝日新聞、2018/07/01)
- 「(いびつな政策の犠牲者)ベトナム人実習生らの相次ぐ死」(朝日新聞、2018/10/14)

(5) 参考資料等

- 『亡びゆく言語を話す最後の人々』(K. デイビッド・ハリソン、原書房、2013)

7 単元をととした児童生徒の反応/変容

反発も見られた。例えば、「日本では、それほど女性は差別されていない」、「パニックフィルムを見せられているようだ」、「発展途上国を支援すれば、地球の環境は更に破壊される」など。また、「話は理解できるが、今何をすればよいか分からない」といった戸惑いも多く見られた。これらの否定性や戸惑いは、良い兆候だと考えている。ESD は知識の伝達だけではない。むしろ、ESD は、事実・現実を目の当たりにして、その現象を吟味、評価しつつ、世界に対して行為する主体を再構成するプロセスであるべきなのだろう。反発や否定性、不安、そして時には「態度保留」こそ、生徒たちが、倫理的に迷い、自分の生き方を自己決定してゆくために必要な「躓きの石」なのではないかと思える。

一方で、ポジティブな反応も様々だった。SDGs をジブンゴトにする際に、いじめの経験を告白する生徒、貧困家庭出身の同級生がいじめられていたことを述懐する生徒、LGBT の友人の告白を紹介する生徒、SDGs 間の関係を考え抜く生徒、自分のふるさどについて熱く語る生徒、カンボジアで見た人々の幸福感に言及し我々日本人の幸福感を批判的に再吟味する生徒など様々だ。これまで国際というと、航空会社での勤務に憧れるというのが女子生徒たちの一般的な傾向であったが、現在、「国際」といえばESDに関わる仕事という認識に変わりつつある。一方では、生徒会による海岸清掃ボランティア活動や、ダンス部によるESD作品の創作など、授業の範疇を超えて生徒たち自身が動き出している。

8 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

P (計画)	(研修前)女性教育に焦点を置いた取材計画を立てていた。(研修中)戦争、人権、伝統文化、近代化、グローバル化など問題の多様性に気づいた。(研修後)この多様性を、如何にESDの対象とするか、また、ESDと英語授業を如何に統合するかに悩んだ。
D (実行)	2名のネイティブ教員を含む英語教員チーム(5人)で授業をおこなった。また学年全体を対象とすることとした。3時間連続の公開授業で、ESDの視点から英文テキストを読み返すというCLILの手法をとった。
C (検証)	最後の話者たちの人権問題に関する深い理解や、フォトランゲージのリテリング活動、また、県知事への英文の手紙の作成など、公開授業内で十分にできないことがあった。
A (改善)	その後、中高全校生徒に対して日本語での授業をおこない、より多くの事例を使って内容をより深く理解してもらった。また、質問を「もし最後の話者だったら」(共感)から、「もし最後の100人の話者の一人だったら」(協働)に変えて、母国語を消滅から守るための具体的なアクションプランについての作文に取り組んでももらった。

9 教師海外研修に参加して

フェアトレードについて学んだ後でも、一步学校を出れば、搾取的なグローバル企業が提供する安価な商品に目がいく。限られたお小遣いの中でのやり繰りだから当たり前のことだ。大人も同じ。分かっている、目の前の商品の社会的な生産過程が見えなくなる商品フェティシズムの呪縛からは逃れられない。グローバル化の渦中、国内経済は空洞化し、市場は途上国で生産された安価な商品であふれる。我々大人でさえ、日々不安の中で小さくなって生きている。ましてや、生徒たちの心を揺さぶるにはどうしたらいいのか。そのような藁にもすがる想いで、本研修に応募した。研修は、予想を遥かに超え、私は生徒に伝えるべき言葉を見つけることができた。ESDに情熱を燃やす指導者、ボランティア活動に携わる人々の姿、殊に若者たちの異国でのチャレンジを見て、爽快な気分を味わった。言葉は見つけたが、それは答えを見つけたわけでは全くない。この新しい時代を乗り切るには経験、発想の柔軟さ、そして他者との協働力が必要だと言われている。それは時間(単位)として積み上げられる知識ではない、人間力と呼ぶしかない総合的な能力だ。日常に「埋没」し滅びを待つか、それとも人として「生きる」ために、日常の中に新たな目的やきっかけを見つけて頑張るのか。この研修で掴んだ「言葉」で、生徒たちの心揺さぶり、選択を迫り、励まし続けたい。そして自分もこの研修での経験を風化させずに、生徒たちの「人間力」の育成のための新しい教育活動に日々挑戦したいと切に思っている。